

編集後記

今年度も3年生の演習における成果を報告書としてまとめることができた。関係各位に深くお礼申し上げる。

今年度は基本的に対面形式の授業に戻ったが、いつ何時事態に変化が訪れるのか予想がつかないため、実験は基本的にオンライン形式で行った。感染症対策の必要性からはじめたことではあったが、演習の実験をオンラインで行うことに利点があることにも気がつく。まずは、実験実施のコストが下がるということである。対面実験の場合は、実験者が参加者のアポイントを取って日時を調整し、その上で実験室の予約を確保するというのを参加者ごとに準備しなければならない。当日はあらかじめ実験室を準備しておいて参加者を迎え、事前説明に同意書の確認、練習試行の確認をして無事進行しているようであれば終了を待ち、それから事後説明や質問への回答などを行う。参加者が返ればデータを保存し、実験室を片付けてから帰る。オンライン実験であれば、これらのいずれもが必要でなくなる。

その反面、オンラインで行うのであれば、事前の準備は入念に行う必要がある。書面もしくはスライドによる説明だけで十分に課題の内容が理解できるようなものを用意しなければならない。実験者に質問ができるしくみを作ることも重要であるが、実際に連絡を行う参加者は少数派であるように思える。実験プログラムも追加的な説明なしに課題が理解できるように工夫する必要がある。参加者のリクルートにおいて日程調整のウェイトは小さくなるが、協力を応諾したものの実際には参加しないケースが多くなるのが頭の痛いところである。

対面実験とオンライン実験にはそれぞれに長短があるが、教育的な効果を考えるのであればどちらが好ましいのだろうか。長年対面実験を指導してきたせいも、学生が実際の参加者とのやり取りを経験しないということを考えると落ち着かない気分になる。一方で、実験者がその場になくても通用するような資料やプログラムを工夫することには意義があるとも感じる。また、オンライン実験であれば時間や場所にとらわれず、複数名同時に実施できるということは、運用上は極めて合理的である。ただし、これまでは考えられなかったような、深夜の時間帯に参加者が実験に取り組む場合があることの是非はにわかには判断しがたい。今後も情勢を見守りつつ考えていきたい。

2023年3月14日

大正大学心理社会学部人間科学科

井関 龍太

r_iseki@mail.tais.ac.jp